

ラーニング・アドバイザーが伝える！レポートの書き方セミナー

——前編：課題への答え方編——

学生サポートデスクには、レポート関連の相談がたくさん持ち込まれています。中でも多く見られるのが「課題文が曖昧で答え方がわからない…」という趣旨の相談です。そこで「レポートの書き方セミナー」の前編として、曖昧な課題への答え方に照準を絞って講演とグループワークを行いました。

【イントロダクション：レポートの特質とは？】

まず、レポートという文章の特質についてラーニング・アドバイザー（LA）が整理を試みました。文章を書く際には「誰に向けて何を伝えるか」を意識することが不可欠です。この観点から言えば、大学のレポート課題は「授業担当教員に向けて自分の理解度を示すこと」が主たる目的となってきます。その上で、授業で示された論点を深めていけば魅力的なレポートになることでしょう。このようなレポートの特質について「自由作文コレポートコ学术论文」という大枠を示した上で解説を行いました。特に学术论文の場合は自ら課題を捻出し、その課題の重要性を多方面から意味づける作業も欠かせません。

【グループワーク：“オリンピックについて”】

とはいえ、設問が漠然としたレポート課題にはどうしたらいいのでしょうか。この点について考えるべく、全学対象の基礎科目を念頭に置いた例題（「オリンピックについて各自の観点から論じなさい」）でグループワークを行いました。所属の異なる参加者を集めて四人一組のグループを作り、①オリンピックの何を論じるか、②その対象をどのように論じるか（調査や情報収集の方法など）、③それらを的確に伝えるにはどうしたらいいか（レポートに盛り込むべき情報の取捨選択）を順に議論していきました。同じ課題に対して全く異なる執筆構想が飛び交う中、読み手（レポートを課した教員）にとって明瞭なレポートとは何かを考える機会になったのではないのでしょうか。グループワークを踏まえて、①論じる対



象の明確化、②自分の観点の明確化、③キーワードの定義、④情報の収集と分析、⑤（可能であれば）結果の考察と意味付けが曖昧な課題だからこそ重要になると議論をまとめていきました。

【LAによる実践：ジェンダーの観点を例に】

そして最後に、例題への取り組み方の一例を LA 側から提示しました。筑波大学で利用可能なデータベースを概説した上で、ジェンダーの観点から先の例題を掘り下げました。スポーツをめぐるジェンダー問題の歴史的背景に簡単に触れた後、①日本の新聞における女性スポーツ像の変遷と②日露米における女性スポーツ像の相違について検討を試みました。同じ例題に向き合うことで、参加者の方々も問いの絞り方やメディア分析の手法などを追体験できたのではないのでしょうか。

このように「課題への答え方編」では、①レポートという文章の特質、②一読で明瞭な文章を書くための工夫、③メディア論的観点からの分析・考察の深め方、について考えました。当日の資料は以下にありますので、ご関心をお持ちの方は是非ご覧ください！

<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/tsukuba-only/LAseminar/20161115.pdf>

レポートの書き方セミナー 前編：課題への答え方編

※学内限定。大学のネットワーク環境からアクセスしてください。

講師：OYAMA(人文社会科学研究科)



講師：NATALIA(人文社会科学研究科)



ラーニング・アドバイザーが伝える！レポートの書き方セミナー

——後編：本論の書き方編——

後半のセミナーでは、実際に課題として求められるレポートのなかでより良い分析や考察を深めていくことを目指し、そのようなレポートの骨子に当たる「本論」とは一体どのようなものなのかについて扱っていきました。また、様々な分野の方々に幅広く実感を持っていただくことを想定しながら、LAで理系（数学）の IIJIMA と文系（教育学）の OYAMADA の 2 人が、それぞれの視点や経験則からレクチャーを担当しました。

【前半：理系パート】

一般に理系と呼ばれる領域で出されるレポートを自分自身の経験から 3 種類に分け、構成やまとめ方などを紹介しました。

まず紹介したのは「テスト型レポート」です。この型では大抵が授業で扱った定義や公式などを使うようになることが主題なので、授業の内容をしっかりと理解することが重要です。次は「調査報告型レポート」で、調査課題が出されてそれについて調べ、まとめた物を出すというものです。セミナーでは「視覚における v4 の機能を調べよ」という課題を例に、自身の理解、文献を用いた詳細な調査、まとめと流れに沿って書き方の一例を示しました。最後に紹介したのは「実験レポート」の書き方です。実験レポートは目的、手順、結果、考察の流れで書きます。経験的に「目的」「手順」は実験のレジュメをまとめ、「結果」では表や図を用いて実験で得たデータを詳細に書きます。一番重要な部分は「考察」で、様々な観点からなぜこのような結果になったのか、書籍なども参考にしながら、自らの考えをまとめます。

気になる点を調べ、事実をしっかりと書く、基本的な部分に気をつけることで、十分に良いレポートが書けるはずです。皆さんもセミナーを参考にどんどんレポートを書いてみてください。

【後半：文系パート】

レポートの代表的な「説得ストーリー」の 3 パターンを紹介し、それらの「説得ストーリー」が自分



の主張をより良く提示するためのツールとなることをお伝えしました。これからレポートに取りかかる皆さんには、自分がレポートのなかで表現したいことをイメージした上で、色々な「説得ストーリー」を構成していただきたいと思います。

そして、そのような「説得ストーリー」をより“説得的”なものにするためには自分の主張に関連する根拠や論拠が必要となりますが、そういった論拠やレポートの手がかりを探し出していくためにも、図書館のデータベースは非常に心強い味方です。筑波大学附属図書館には多くの専門書が所蔵されており、それらを手にとって見ることができ、さらにはオンラインで論文を閲覧することもできます。このようなデータベースの強みを存分に活用して、皆さんには説得力の高い多くの知見を見つけていただきたいと思います。

集められた知見が皆さんのレポートの論拠となり、魅力的な「説得ストーリー」を作る要素となれば嬉しいです。

資料はこちらからご覧いただけます。

<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/tsukuba-only/LAseminar/20161122.pdf>

レポートの書き方セミナー 後編：本論の書き方編

※学内限定。大学のネットワーク環境からアクセスしてください。

講師：IIJIMA(数理物質科学研究科)



講師：OYAMADA(人間総合科学研究科)



2016/12/16 発行